

IV-20

居住地域と都心の緑の認識構造とその評価

東北大学 学生員 ○中村 歩

東北大学 正会員 稲村 肇

1. はじめに

緑が我々の生活環境に及ぼす影響は大きく、人はある行動によって緑を見たり緑と接したりする。

緑と人の行動との関係を明らかにすることによって人と緑との係わり方、人にとって必要な緑のあり方が分かるはずである。

2. 研究方法

個人の1日の活動、選択肢アンケートによる「印象的な緑」から緑の必要性の考察を検討したが、事前調査で幾つかの問題点が明らかになったため、本研究では以下に示す方法で行うものとした。

増田(1987)¹⁾らは、サインマップを用い地図上に行動領域、緑を自由に記入してもらい行動領域での緑のイメージ構造に関する研究を行っている。選択肢とサインマップ法の大きな違いは、あらかじめ指定された緑に対して答えるか、回答者自身が緑を思い描き挙げるかである。つまり、後者の方がより人が必要と考えている緑が求められる。本研究では、このサインマップ法によるアンケートを採用し仙台市内の居住地域及び中心部での生活行動領域と緑に関する調査を行った。

〈本調査〉増田らによる研究では、緑とかわる機会が最も多いと思われる主婦のみを対象とした調査であったが、本研究では、それ以外の普段特に緑に関心を持っていない人からの回答も得るために、アンケート用紙を1件につき3枚配布し、世帯主とそれ以外の2人に回答を求めた。対象地区と回収結果を表-1に示す。対象3地区は、緑の量が比較的少ない、多い、その中間として選んだ。

表-1 アンケート回収結果

	居住地域		仙台中心部	
	配布世帯数	有効回答数	配布世帯数	有効回答数
青葉区上杉	120	106	100	124
泉区高森	100	108	100	163
太白区八木山本町	100	129	100	153

3-1 アンケートの主な内容

「身近に感じる領域」、「日常生活で通る道」、「印象的な緑」をそれぞれの居住地区および仙台中心部の地図上に自由に記入するものとした。

「身近に感じる領域」からは日常生活での行動領域の面的広がり、「日常生活で通る道」から行動ルートを、「印象的な緑」からは各個人の緑に対する認識を求める。これらより、日常生活の領域及び移動と緑認識の関係を考察する。

3-2 分析方法

(1) 居住地域

①「身近に感じる領域」、「日常生活で通る道」、「印象的な緑」のそれぞれについて個人のデータを地図上に重ね合わせて集計する。

②各個人の身近に感じる領域の面積を算出する。

③「印象的な緑」は、記入数の多い上位5ヶ所を決定した。5ヶ所を表-2に示す。

表-2 5ヶ所の印象的な緑

居住地区	印象的な5ヶ所の緑				
青葉区上杉	上杉公園	勝山公園	東北大学部	街路樹①	街路樹②
泉区高森	4丁目公園	5丁目公園	東公園	堤	街路樹
太白区八木山本町	動物公園	1丁目公園	公園	青葉山保存緑地	街路樹

④次に示すデータをサインマップより集計する。

I. 自宅から各緑までの距離（公園は中心、線の、面的広がりの大きな場所はある1点を決めて自宅からの距離を測る。）

II. 「日常生活で利用する道」として記入の有無。（公園、緑地の場合はそれに面する道、街路樹の場合はその通り）

III. 「印象的な緑」として5ヶ所の緑の記入の有無。

(2) 仙台中心部

①「身近に感じる領域」の個人データを地図上に重ね合わせる ②「印象的な緑」を集計する。

3. 結果および考察

4-1 居住地域

(1)「身近に感じる領域」を生活行動領域と考える。生活行動領域面積は、八木山の場合は9ha、高森では、24ha、上杉では18haまでに住民の7割が集中することがわかった。八木山での面積ごとの人数分布を図-1に示す。

領域の広さは、日常生活で利用する施設が地域内のどこにあるかによって変化し自宅からそれらの施設の間で生活領域が形成されると考えられる。つまり、地区の端に商業施設のある地区は領域が広がり、

中心にある地区は比較的狭くなっていると言える。

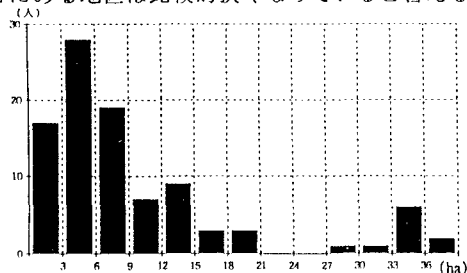


図-1 身近に感じる領域面積（八木山）

八木山本町の場合、一丁目は自宅から生協と児童公

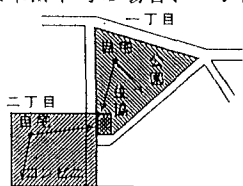


図-2 身近に感じる領域（八木山）

園の方向に、二丁目は生協とコンビニエンスストア方向に領域が広がっている。それ以外の方向は、バス通りに沿って領域が区切られる。

(2) 自宅からの距離と各距離の人数との関係

「日常生活で通る道」、「印象的な緑」から活動（移動）と緑の関係を分析する。分析方法の④で示したⅡ、Ⅲのデータを基に、各地区の5ヶ所の緑についてグラフを作成した。

(単位:人)

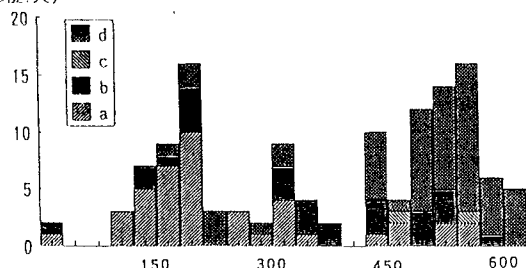


図-3 印象的な緑と自宅との距離（本町1丁目公園）

凡例a～dは次のとおりである。

- a. 「日常生活で利用する道」、「印象的な緑」の記入がある
- b. 「日常生活で利用する道」のみ記入がある
- c. 「印象的な緑」のみ記入がある
- d. 両方記入がない

八木山本町一丁目公園（図-3）は、自宅からの距離が400m以内の場合80%の住民が公園を緑として認識しているが、400m以上の場合認識度は25%と極端に落ちる。

八木山、高森地区では、児童公園は自宅からある距離を超えると認識は低下する。近隣公園、保存緑地、動物公園の面的広がり大きい緑の認識は、自宅からの距離に左右されない。街路樹は、aの場合が多く、道を利用することで緑を認識していることが分かる。緑の少ない上杉地区は他の地区と比べ公園

の認識度が高い。

4-2 仙台中心部

居住地域とでの回答と異なり領域、道ともに大まかな回答しか得られなかった。回答者が中心部に対して大まかにしか認識していないことを示している。身近に感じられる領域内の緑で街路樹と青葉城跡について各地区での認識を示す。地区により認識に大きな違いは見られない。

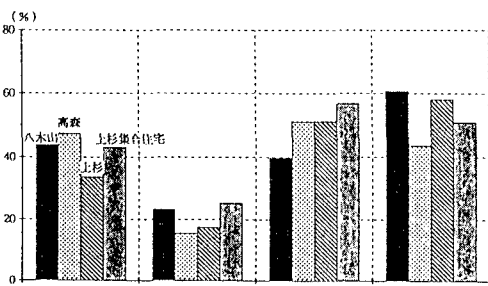


図-4 印象的な緑（街路樹・青葉城跡）

青葉通り、定禅寺通りは認識度が40%と高い。この2つの通りはけやき並木で広瀬通りは銀杏並木である。けやきは銀杏に比べ視界に入る緑の量が多いため認識度が高いと考えられる。面的に広く配置された青葉城跡の緑は線的な配置の街路樹に比べ認識されやすいと考えられたが、定禅寺通りとほぼ同じであった。緑を配置するスペースの狭い箇所での街路樹は有効であると言える。

4. 結論

本研究により以下のことが明らかになった。

- 1) 日常生活での行動領域は、主にバス通り、買い物などでよく利用される商業施設により決定される。
- 2) 児童公園の緑としての認識は自宅からの距離により決まる。
- 3) 居住地域での街路樹は道の利用の有無により認識が決定され、面的な広がりある緑は、自宅からの距離が離れ道の利用がない場合でも認識度は高い。
- 4) 仙台中心部に対する住宅地区居住者の認識は居住地区に比べかなり大まかなものである。
- 5) 街路樹の配置は線であるが視界にはいるときは面として捉えられるため緑の量が多く感じられる。緑を配置するスペースの少ない中心部では有効である。

参考文献

- 1) 増田：日常生活行動領域における緑のイメージ構造に関する研究。造園雑誌vol. 50(5), 1987
- 2) 根本：居住環境における緑の質と住民意識の関係。日本都市計画学会学術研究発表会論文集18号, 1983
- 3) 阿部：都市計画における緑地の調査研究（Ⅱ）—緑地意識と緑地の保全整備、長野市を事例として—。日本都市計画学会学術研究発表会論文集第14号, 1979